

高校生 医学の最先端体験

遺伝子解析し成果発表

大分大は8月、高校生を対象にした研究体験プログラムを実施した。全国の大学・研究機関での最先端研究に触れてもらう「ひらめき☆ときめきサイエンス」（日本学術振興会主催）の一環。発がん性物質などにより生じる遺伝子へのダメージと生体防御反応の解析に取り組んだ。

プログラムは3日間。前後期（10～12日、18～20日）に県内外から生徒計16人が参加し、同大医学部先進医療科学科の花田克浩講師（52）が取り組む研究について学んだ。

人間はDNAストレス（発がん性物質や放射線、紫外線など）によって細胞の遺伝子に生じた傷ががんや老化促進の原因となる一方、損傷を修復する機能を併せ持つ。生徒たちは化学物質によるストレス因子を遺伝子に与え、蛍光レーザー顕微鏡を使って傷ついたDNAと修復している様子の解析などを体験。花田講師や同科の学生が細胞の仕組みなどを解説した。最終日に生徒たちは研究成果を発表した。

参加した大分西高3年の吐合美空さん（18）、佐伯鶴城高3年の渡辺佳音さん（17）は「学校にない機器を使い、授業では体験できない実験ができた。進路選択の参考になった」と話した。

（吉田正史）

大分大で「ひらめき☆ときめきサイエンス」



④蛍光レーザー顕微鏡を使ったDNA解析を体験する生徒（大分大）



大分大医学部先進医療科学科4年の田辺さん

筆頭著者を務めた論文、国際学術誌掲載へ

田辺さんは大分舞鶴高から同科1期生として入学した。今回のテーマに関心があつたため2年次から研究に加わり、論文では薬が立位培養した細胞に与えるダメージの検証を担当。論文は学生の田辺さんを含む6人で共同執筆し、筆頭著者3人の一人を務めた。

同科の学生による論文が国際学術誌に受理されたのは初めて。研究と論文に関わった同科の花田克浩講師（52）は「学科開設4年目で学生としては初の大きな成果になった」と喜ぶ。田辺さんは来春の卒業後、同様の研究に取り組む企業の就職が内定している。「学生として論文に加わることができてうれしい。社会人になっても研究に励んでいきたい」と話した。

（吉田正史）



筆頭著者を務めた論文が国際学術誌に掲載されることがなり、学生として関わることができてうれしい」と話す田辺さん（大分大医学部）